読売 教育ネットワーク

社会はまるごと学校――
すべての大人が先生です

会場に本物の投票箱や記載台を持ち込み、模擬授業を行った硤合宗隆教諭（読売新聞東京本社で、2・3面へ）

巻頭特集 「18歳の1票」主権者教育セミナー 2・3

高円宮杯 第67回 全日本中学校英語弁論大会 4・5

全国学生英語プレゼンテーションコンテスト 6・7

本紙編集委員、開成高で出前授業 8

慶應大生が女子高でポケモン英語出前授業 9

第1回片倉もとこエッセイ賞 久保樹梨亜さん 最優秀賞 10

お知らせ・短信 11　英サセックス大学「アフリカでビジネスを体験して学ぶ」 12

2015.12
Vol.12

18歳の1票

主権者教育セミナー

わかりやすく模擬授業

砂合宗隆・玉川学園教諭

小中高教員ら100人参加

選挙権年齢の引き下げを機に教育現場で求められる取り組みを考える「18歳の1票 主権者教育セミナー」（読売新聞社主催、文部科学省後援）が11月29日、東京・大手町の読売新聞東京本社で開かれ、会場は小中高校の教員ら約100人で満席となった。東京大学の小玉重夫教授が基調講演し、文科省の合田哲雄・教育課程課長が新たに作成した副教材などについて解説。玉川学園（東京都町田市）の砂合宗隆教諭による模擬授業も行われた。
（この記事の本文は、読売新聞の教育面で12月10日に掲載されました）

グループに分かれて話し合う参加者に声をかける砂合教諭

「皆さん、今から高校3年生になってもらいます」

砂合教諭が先生役、会場の参加者が生徒役になる模擬授業が始まった。2003年から模擬選挙を小中高校の授業に取り入れている砂合教諭ならではの試みだ。参加者には、大学生や高校生の姿も見られた。

本物の投票所の雰囲気を出すため、砂合教諭が町田市選挙管理委員会から借りてきた投票箱や記載台が設置され、壁には政党のポスターも貼られた。

授業ではまず、スライドで「32・6％」の数字が大きく映し出された。砂合教諭は昨年12月に行われた衆院選の20歳代の投票率だと説明し、「現状では将来の担い手の意見が反映されていない」と問題提起した。

続いて参加者は6人ずつのグループに分かれ、昨年の衆院選の各党のマニフェスト（政権公約）や選挙公報などについて、疑問点をぶつけ合った。各党の政策の是非を自分で判断する力を養うのが狙いだ。

「政策に予算の裏付けはあるのか」「『未来志向の憲法』はどういう意味かわからない」。参加者からは様々な意見が上がった。

マニフェストの判断、投票も

砂合教諭は「マニフェストの表紙はなぜ、どの党も党首の顔の写真なのか」という疑問に焦点を当て、「高校生からよく出る質問だ」と紹介。「ポスターの色や（党首の写真の）視線にもメッセージが隠れている。こうした分析をすることに生徒は興味を抱く」と解説した。また、「公約は良いことばかり書いてある」という指摘には、「それに気付くことが、主権者教育で大事なこと」と強調した。

最後に参加者の代表による比例選の模擬投票が行われ、砂合教諭は「『投票はそんなに難しくないんだと分かった』という生徒が多い。その意識を持ってもらうことが投票行動につながる」と語った。

セミナーに参加した私立横浜女学院高3年の鈴木晴子さん（18）は、「各政党の公約の比較の仕方も分かった。来年の選挙では、ここで学んだことを参考にしたい」と話した。また、福井県教委指導主事で同県東京事務所の山本泰弘さん（47）は、「専門家の話を聞き、主権者教育の必要性が実感できた。県内の学校に今回の内容を伝えたい」と話していた。

本物の投票箱や記載台を使って行われた模擬投票

10分	講義	選挙の重要性や18歳への選挙権年齢引き下げの背景などを解説
15分	グループ作業	選挙公報、マニフェストなどを教材に、各自の疑問点を書き出させ、グループで話し合わせる
10分	発表	グループごとに疑問点を黒板に書き出させ、疑問の答えを生徒に考えさせる
10分	模擬投票	投票先を考えさせ、名簿確認や投票用紙交付などの流れも体験させる
5分	まとめ	投票の感想や質問を発言させる

砂合教諭による授業案

2016年1月24日に第2回セミナー

読売新聞社は第2回の主権者教育セミナーを1月24日（日）午後1時から読売新聞東京本社で開催します。ドイツの政治教育に詳しい近藤孝弘・早稲田大教授の講演、文部科学省の梶山正司・初等中等教育局主任視学官による解説のほか、全国で出前授業を展開するNPO法人「ユースクリエイト」の原田謙介代表の模擬授業も行います。セミナーの模様は、会報で順次ご紹介していきます。

なお、読売新聞は主権者教育に関する中学、高校への記者の出前授業を行っています。ウェブサイトより申し込み下さい。
http://kyoiku.yomiuri.co.jp/senkyoken/

基調講演 政治的教養の育成 積極的に

小玉重夫 東大教授

選挙権の18歳以上への引き下げで主権者教育が注目されているが、従来、学校では、政治的中立性に配慮し、政治を教育に持ち込むことはタブー視されてきた。今こそ、教育基本法第14条1項の「政治的教養は、教育上尊重されなければならない」という内容を実現すべきだ。

20歳代の投票率低下で、主権者教育、「シティズンシップ教育」の重要性は増しており、小中高校で教育に本腰を入れるべきだ。安全保障法制、TPP（環太平洋経済連携協定）、軽減税率など現実の政治的事象を扱いながら、対立点や論点を理解する「政治的リテラシー」の向上を目指す教育が大切だ。

文科省が全国の教育委員会などに出した高校生の政治活動についての通知は、一定の制限や禁止もあるが、全体的には、高校生の政治活動や政治的教養の育成を推進するものだ。学校現場は、通知をもとに政治教育を積極的に行う必要がある。

生徒の議論深まるよう工夫を

合田哲雄 文科省教育課程課長

文科省は高校生の政治的活動について、一定の制約を前提にしつつ、18歳以上の学校外の選挙運動を尊重する通知を出した。また総務省と共に高校生用の副教材を作り、全高校生に配布中だ。

来年夏の参院選を見据え、何が選挙違反かなどはぜひ指導してほしい。また、現実の政治の動きを扱うとともに、模擬選挙や模擬請願など実践的な教育を積極的に行うようお願いしたい。政治や選挙に関する教育をためらう場合もあるだろうが、ルールや留意点をふまえれば、様々な創意工夫が可能だ。

大事なことは生徒が主体的に調べ、深く考えること。教員が自ら主義主張し、それと異なる意見を否定する雰囲気では、生徒から考える機会を奪う。結論に至る過程を大切にし、議論が深まるように様々な見解を示すことこそ、教員の役割だ。総合学習を含む様々な取り組みを期待している。

高円宮杯 第67回
全日本中学校英語弁論大会

高円宮杯第67回全日本中学校英語弁論大会の決勝大会が11月27日、大会名誉総裁の高円宮妃久子さまをお迎えして東京都千代田区のよみうり大手町ホールで開かれ、那覇市の沖縄尚学高校付属中2年の英（はなふさ）ひなこさんが高円宮杯を手にした。
（この記事の本文は、読売新聞で12月15日＝一部地域は１６日＝に掲載されました）

表情豊かに意見発信

２０１５年９月から各都道府県での予選大会を勝ち抜いた代表生徒１５１人が11月25、26の２日間にわたり決勝予選大会に出場。上位27人が決勝大会に進み、７位までの入賞者が決まったほか、協賛各社から様々な賞が贈られた。大会後、帝国ホテルで出場者と関係者ら約７００人を招いて開かれた記念レセプションでは、表彰式のほか、上位３人が受賞したスピーチを披露した。

表彰式で高円宮久子さまは入賞者やその指導者たちを祝福。「全体のレベルが上がりました。ここからの努力が大事。ぜひ将来に向けて頑張っていただきたいです」とお言葉を贈られた。

高円宮久子さまから優勝杯を受け取る英さん ＝奥西義和撮影

キャロライン・ケネディ駐日米大使からも「皆さんの英語力を、新しい考え方を学び、世界中の人々とコミュニケーションすることに役立ててほしい」とのメッセージが届き、同大使館のアドラー副文化交流担当官が読み上げた。

１～３位の生徒には高校・大学奨学資金が送られたほか、所属校を代表して指導教諭にも賞状と副賞が贈呈された。７位までの入賞者のほか、社会性がありメッセージ性の高い優秀な弁論を行った生徒に贈られるコカ・コーラ特別賞に３人、「人とのつながり」をテーマに、優れた弁論をした生徒に対するワールド・ファミリー賞に１人が選ばれた。

スマホ依存に疑問　1位・英さん

１位の英（はなふさ）さんは、現代の生活には欠かせなくなったスマートフォンを題材に選んだ。「何でもできるからこそ、スマートフォンという名前なのだろう」と推論しつつも、便利さゆえの「依存症」に疑問を呈し、挙げた例が、スマホ使用しながらの運転による事故で１年に３６００人も死亡する事実、学業への悪影響、劇場などで鳴るスマホの着信音だ。理由について、「スマホのような技術が善悪の違いを言ってくれないからだ」と説明したうえで、英さんは、ながら運転をしている運転手に「それは違反だよ。誰かが死ぬよ」とたしなめる「完璧なスマホ」があったら、と訴えた。時に、スマホの口調をまねた話し方を交え、聴衆を引き付けた。

「皆から応援してもらってきたが、まさか本当に（１位に）なれるとは思わなかった」と語り、将来は「日本と外国の懸け橋になるような仕事に就きたい」と声を弾ませた。

名前の大切さ訴え　2位・渡邉君

２位となった渡邉（わたなべ）君は、ここのところ過敏になりつつあるプライバシー、個人情報の問題を取り上げた。「渡邉太陽」という名前を誇りにしているのに、あるとき病院で「28番さん」と呼ばれたことをけげんに思い、調べると「個人情報を守るため」と分かった。しかし「過敏になりすぎているのでは」と警鐘を鳴らす。そして、テディベア人形にも名前をつけると特別な存在、親しみが感じられる、と指摘、「名前で呼ぶことは有意義なコミュニケーションの第一歩だ」と訴えた。

39人いる自分のクラスでは番号が39番だ、ということに言及して最後は「先生、ぼくを『39番』と呼ばないで下さい」と言って締めくくり、喝采を浴びた。

勇気と挑戦テーマに　3位・峯松さん

３位の峯松さんのテーマは勇気と挑戦。72歳のアメリカ人の女性写真家パメラを連れて日本の寺を案内した際に、パメラが「お寺の鐘を鳴らしてみたい」と言う。だが、鐘楼には「許可なく鐘を鳴らすべからず」とある。パメラに説明すると、彼女は「許可をもらってきて」と引く様子はない。「いや」とは言えず住職に事情を説明すると「そんな頼みは初めてだ」と言いつつも、日の入りの午後４時半に鐘を鳴らすからそのときに来るならいい、と認めてくれた。

「ゴーン」と響く鐘の音に感動しつつ、勇気を出して挑戦することの大事さを学んだ峯松さんは、その後、生徒会役員に立候補する際や空手の大会に出た際にこの鐘の音を思い出しつつ勇気を出すようになった。そして「皆さんにも鳴らす鐘を見つけてほしい」と結んだ。「抑揚や声の大きさを練習した成果が出せた」と満足げだった。

高円宮杯中学校英語弁論大会

67回を数える伝統あるこの大会は、終戦直後の1949年にスタートした。

「将来の日本を担う国際性豊かな青少年の育成」という趣旨に、故高松宮さまが賛同されて創設された。99年の第51回大会からは高円宮杯に衣替えし、現在に至っている。

毎年、校内予選を含め、全国から約10万人が参加し、中学生による英語スピーチコンテストでは最高峰の大会として定着している。決勝大会は、都道府県代表が自作のスピーチを披露して競い合う。

中学生の時に出場したOB、OGら現役大学生が運営に携わるなど、出場者間の結び付きが強いのも特徴だ。これまで、ボーカリストの鈴木重子さんや有村治子・前女性活躍相ら多彩な人材を生み出してきた。上位入賞者を対象に協賛企業の三菱商事が英国短期留学制度を設けるなど、人材育成面の支援も充実している。

読売新聞社は、教育の質の向上に寄与するため、教育関連のコンクールを数多く開催している。この大会と全国小・中学校作文コンクール、日本学生科学賞は半世紀を超える歴史を持ち、教育3賞として、「読売教育ネットワーク」の重要な柱になっている。

【主催】読売新聞社、日本学生協会（JNSA）基金　【後援】外務省、文部科学省、NHKほか　【特別協賛】コカ・コーラ　【協賛】日本IBM、三菱商事、ぺんてる、ワールド・ファミリー、国際ソロプチミスト東京一東、ECC、ベストワールド、インターナショナル・エジュケーション・サービス

上位入賞者　（敬称略、4位以下は喜びの声も）

●1位
英ひなこ（那覇市・沖縄尚学高校付属中2年）
「The Perfect Smartphone」

●2位
渡邉太陽（大阪府高槻市・関西大中等部3年）
「The Power of Names vs. Privacy」

●3位
峯松礼佳（浜松市・静岡大付属浜松中3年）
「Do Not Ring Without Permission」

●4位（ワールド・ファミリー賞も受賞）
矢嶋花菜（川崎市・洗足学園中3年）
「More Than Ten Fingers」
「雰囲気にのまれてしまい、完全燃焼はできなかったが、いい結果に驚いている」

●5位
野畑夏鈴メリーナ（愛知県豊橋市・桜が丘中3年）
「Half or Double？」
「緊張に慣れるため、多くの先生の前で練習してきた。おかげで今日は堂々と出来た」

●6位
甲斐愛果（宮崎県延岡市・尚学館中1年）
「Hammer」
「入賞にはびっくりして泣いてしまったけど、『みんなを笑わせる』というモットーを貫けた」

●7位
金城萌音（那覇市・興南中3年）
「I Can Change the World」
「予選のときよりも決勝大会でベストの力を出せた。沖縄に戻ってから実感が湧いてきた」

●コカ・コーラ特別賞
加藤　蘭（仙台市・仙台市立中山中３年）
「Hand in Hand – What We Can Do Now –」
「全国大会に出られると思っていなかったので、賞までいただいて、状況がのみ込めていない」

野中瑠美南（千葉県市川市・国府台女子学院中学部３年）
「Because We Only Live Once」
「主張をただ訴えるのではなく、体験を共有しようと思ったのが良かった。本当に満足している」

杉川みずほ（松山市・松山市立久谷中３年）
「Realizing Inner Strength」
「自分の思いを届ける機会を得られて、とてもいい経験になった」

全国学生英語プレゼンテーションコンテスト

英語力だけでなく、論理的な思考や説得力などを問う「全国学生英語プレゼンテーションコンテスト」（主催・神田外語グループ、読売新聞社）が11月28日、東京都千代田区のよみうり大手町ホールで開かれた。第4回の今回は、全国の大学、専門学校から過去最多の165校677人が応募する激戦となった。この日はまず、2次予選が行われ、これを勝ち抜いた個人5人、グループ5組が本選に進み、渾身のプレゼンテーションを行った。
（この記事の本文は、読売新聞で12月16日に掲載されました）

最優秀の文科大臣賞に選ばれた菊池達也さん（右）、夏子さんのプレゼンテーション =秋元和夫撮影

●兄と妹 絶妙のチームワーク

最優秀賞を受賞した名古屋大学4年生の菊池達也さんと南山大学2年生の菊池夏子さんは、兄と妹だけに絶妙のチームワークを見せた。スマートフォンなどを充電するため、電気を少量ずつ取り出す技術を中核としたビジネスを売り込むという設定でプレゼンテーションに臨んだ。

「サハラ以南のアフリカ諸国では、約6億もの人が電気の供給なしに暮らしている」現状を紹介。それでも「70～80％の人が携帯電話を持ち」、「充電施設のある町まで2時間以上歩くこともある」と説明した。一方で、こうした地域の住民は、自前のソーラーパネルを備えるだけの経済力がない。

その解決策として、充電装置とソーラーパネル、発光ダイオード（LED）ランタンを地元の店にセットで貸すビジネスだという。

店は、住民向けに携帯電話などを充電するサービスを行う一方、ランタンをレンタルする。このランタンは、照明だけでなく、携帯を充電する機能も持つ。

菊池さんきょうだいは、実際にこのサービスを展開する企業を訪れて借りたというランタンを手に、このビジネスがいかに有用かを熱弁。「（電気の届かない）暗闇に光をともすだけでなく、そこで暮らす人々の将来に光を」と訴えた。

優秀賞に選ばれた江島彩夢さん

2人は、子どものころベルギーで暮らし、その時、英語の勉強を始めたという。それでも10年以上前に帰国したときの英語は「小学生レベル」で、以後は英語教育に力を入れる日本の学校で継続して学んだという。

今回の勝因について達也さんは「論理的で筋が通った話になるようこだわった。実用性、採算性を軸に1本のストーリーとなるように原稿を作った」と語った。

●絶対に臭くない

個人の部で優秀賞となった金沢大学2年生の江島彩夢さんは、宇宙飛行士の若田光一さんが宇宙ステーション滞在時に着用した消臭下着に使用された繊維を売り込んだ。

宇宙では、シャワーを浴びることも洗濯も出来ず、この繊維が開発される前は、「地球に帰還した宇宙飛行士があまりに臭くて、地上のスタッフがハッチを開けるのを躊躇したほどだった」と解説。地上での利用でも洗濯の回数が減り、環境にもやさしいと強調した。

また、自ら、消臭Tシャツを1週間着続けてこの日に臨んでいると打ち明け、「もし、信じない人がいたら、プレゼンテーション終了後に気が済むまで私のにおいを嗅いでください。絶対に臭くありませんから」と語りかけて笑いを誘った。

江島さんは、「尊敬する（米アップル創業者の）スティーブ・ジョブズさんのスピーチを何度も見て、その良いところを取り入れた」という。こうした努力が賞を引き寄せた。

●地に足の付いた内容目指し

グループの部で優秀賞となったのは京都大学4年生の横山紘樹さんと、共に近畿大学2年生の久保大輔、安澤香織さんの3人組。英語でディベートをする活動を通じて知り合った仲間だ。

取り上げたテーマは、障害者スポーツの認知度向上のための施策。3人は「プロジェクトME」と名付けた策を提案した。Mは、メディア、Eはエデュケーション（教育）のことで、「障害者スポーツを特別なものとするのではなく、me（私）に関わる、すべての人のスポーツと捉えるべきだ」と訴えた。

メディア対策としては、まず、過去にパラリンピックの放映が少なかった、と指摘。メディアがウェブサイトも活用すれば、認知度が高まると説明した。また、ソーシャルメディアの重要性も強調した。

教育に関しては、健常者が通う学校でもブラインドサッカーなどの障害者スポーツの実践を取り入れるよう提案。理解が進み、子どもたちがその後も興味を持ち続ける可能性を語った。

横山さんは、「奇抜なものではなく、地に足の付いた内容にしたいと思った。実際に障害者スポーツの振興につながるよう心がけた」と語った。

優秀賞に選ばれた（左から）久保大輔さん、横山紘樹さん、安澤香織さん

●インプレッシブ賞

インプレッシブ賞個人の部のバクシ星羅さんは、長崎大学の2年生。医学生らしく、エボラ出血熱を探知する装置を売り込んだ。既存のものを小型化したことから「必要な場所に運ぶことが容易になり、封じ込め策がすぐに取れる」とメリットを説明した。さらに、他の感染症にも応用が可能で、空港での防疫にも役立つと語った。バクシさんは受賞後、「たくさんの人が練習相手になってくれて、おかげで、こうして人前で話すことができた」と周囲の人への感謝を口にした。

グループでインプレッシブ賞を受賞したのは、神田外語学院2年生のラグマイ・メグミ、曽根治、河崎海里さんの3人組。最新技術を使った義足を売り込むプレゼンテーションを行った。

冒頭で、義足を使っている人の80％が腰痛に悩まされている現状を紹介。健常者のような自然な歩行ができないからだという。3人が売り込んだ最新義足は、センサーとモーターによって、けり出すときに足首の力と曲げる角度を適切にするなどしてより自然に近い形にする。これによって、腰痛の悩みからも解放されると説明。「ハンディキャップという言葉を世界から消したい」と締めくくった。

河崎さんは「プレゼンテーションはメッセージ性に尽きるという考えを3人で共有した」と、この日に向けた取り組みについて語った。

インプレッシブ賞に選ばれた（左から）曽根治さん、河崎海里さん、ラグマイ・メグミさん

インプレッシブ賞に選ばれたバクシ星羅さん

文部科学大臣賞（最優秀賞）
菊池達也さん（名古屋大4年）
菊池夏子さん（南山大2年）

優秀賞（個人の部）
江島彩夢さん（金沢大2年）

優秀賞（グループの部）
久保大輔さん（近畿大2年）
横山紘樹さん（京都大4年）
安澤香織さん（近畿大2年）

インプレッシブ賞（個人の部）
バクシ星羅さん（長崎大2年）

インプレッシブ賞（グループの部）
ラグマイ・メグミさん（神田外語学院2年）
曽根治さん（神田外語学院2年）
河崎海里さん（神田外語学院2年）

全国学生英語プレゼンテーションコンテスト（通称:プレコン）

グローバル社会での活躍を目指す学生たちに腕を磨く機会を提供しようと2012年に始まった。その年のテーマから一つ選び、それに沿って原稿を自ら作りプレゼンテーションする。1次予選、2次予選を経た個人・グループが本選に臨む。制限時間は10分以内で、その後、審査員による英語の質疑応答がある。審査項目は、内容（40点）、構成（15点）、口頭発表力（20点）、質疑応答（10点）、説得力（15点）。

<テーマ>
①地方創生につながる海外企業の誘致を提案！
②日本の「最新技術」を世界に！
③障害者スポーツの認知度向上のための施策を提案！
④ご当地グルメを世界の食に！

本紙編集委員、開成高で出前授業

「川柳からみたメディアリテラシー」

東京・荒川区の開成中学・高校（柳沢幸雄校長）で11月24日、「川柳からみるメディアリテラシー」と題して、読売新聞東京本社の片山一弘編集委員が高校1年の希望者に講演を行った。片山編集委員は中学、高校を同校で過ごしたOB。今年4月からは本紙「よみうり時事川柳」の選を担当している。

まず、新聞記者の仕事をテーマに体験を踏まえて自己紹介。入社直後に赴任した甲府支局では、驚きの連続。「新聞は世の中を総合的に知るのに最適。メディアの特性を意識しながら利用してほしい」と語り、地方の現状や独自の文化に触れて視野が広がったと振り返った。

週刊誌編集部に配属された時期には、表紙を飾る人物のインタビューを任され、2年間で様々な分野の約100人に会った。新たな取材に追われる中で、事前準備として資料を読んで、まず全体を大きくつかむという習慣がついたという。

メディアの特性を意識して利用を

次に、テレビやインターネットなど他メディアと比較して新聞の特色について触れ、それぞれに異なる利用法があることを説明した。インターネットは検索ができて便利だが、「デジタル化されていない情報に対しては無力」といい、過去の書籍などを含め、図書館や書店もメディアとしての機能を持っていると指摘した。「新聞は世の中を総合的に知るのに最適。メディアの特性を意識しながら利用してほしい」と締めくくった。生徒からは、新聞について「社論は誰が決めているのですか」といった質問が寄せられた。

この日のもう一つのテーマは「よみうり時事川柳」。1950年から始まった同欄は、投書面に掲載され、多くの投稿を集める。かつて読売で選者をしていた川柳作家の尾藤三柳（びとうさんりゅう）さんが、時事川柳の要諦（ようてい）を「スピード、センス、スタイルの3S」と語っていたことを紹介しつつ、自分なりの選の基準を披露した。ニュースを正確に理解していること、新しい見方や批評性があることに加えて、関係者を不当に傷つけないことなどを心がけているという。

実際の川柳作品をいくつもプロジェクターで掲示し、生徒たちに選者になったつもりで、句に対する感想を求めると、活発に意見が出た。何のニュースを題材にした句かということをまず読み取らなければならないが、「四人目の知恵が頼りの増殖炉」という最近の掲載句に対して、「『三人寄れば文殊の知恵』のことわざを元に、高速増殖炉もんじゅの問題には新たな知恵が必要だという意味では」と正解を即答する生徒もいた。

新聞通して知識の共有

同校には強豪として知られ、テレビや雑誌でも紹介されたことがある俳句部があり、今夏で18回を迎えた松山市での「全国高等学校俳句選手権大会（俳句甲子園）」では、8回の最多優勝校だ。聴講した俳句部所属の山田貴紀君は、「川柳は俳句とは頭の使い方が違うと感じた。新聞を通じて知識や常識の共有ができるとわかったので、これからはもっと読みたい」と語り、高校1年の担任である山田雄司教諭は、「川柳から社会を見るという切り口は新鮮で、生徒たちは積極的に講演を楽しんでいた。講演後、片山さんを囲んで新聞の読み方について質問攻めにする生徒をみて、まだまだ新聞というメディアは力強いなと、私も認識を新たにした」と話していた。

川柳について語る片山編集委員（開成中学・高校で）

慶應大生が女子高でポケモン英語出前授業

ポケモン英語すごろくゲームを楽しむ高木学園女子高校の生徒たち。奥の2人はゲームを作った慶應大の学生=秋月正樹撮影

読売新聞朝刊に連載中の「ポケモンといっしょにおぼえよう！英語でひとこと」を活用した出前授業が11月25日、横浜市の高木学園女子高校（高木茂校長）で行われた。

講師は、慶應義塾大学の2～4年生7人。ユニークな英語教育で知られ、「英語でひとこと」連載の監修を担当している田中茂範教授（応用言語学）の研究会に所属するメンバーで、教職を志す学生も多い。福島宙輝（ひろき）助教の指導で、約2か月にわたって「英語でひとこと」を使ったゲームを手作り開発、初めての出前授業に挑戦した。

ゲーム楽しみつつ英語の発音学ぶ

この日、1年生のクラスで行われたのは、すごろくとカードゲーム。すごろくは「英語でひとこと」がマスになっており、サイコロを振ってコマが止まるたびに、マスに書かれた英語フレーズを発音、隠された日本語の意味を当てる。

カードゲームは「英語でひとこと」をカード化したものを使い、5枚選んでフレーズを組み合わせ、英語のスキット（寸劇）を作る。いずれも、楽しく遊びながら、生徒たちが英語で自然にコミュニケーションできるよう工夫されている。

大のポケモンファンという生徒もいて、50分間の授業は大変な熱気。生徒の発音を指導して回っていた田中教授は、「みんなYou made it!（よくやった！）。『英語でひとこと』が英語の授業に活用できることがよくわかった」と講評した。

講師の一人、慶應大3年の鶴田桃子さんは、「生徒が英語を使うことに意欲的で、教えるのも楽しかった。ポケモンを使った授業に大きな可能性を感じました」と話していた。

ポケモンといっしょにおぼえよう! 英語でひとこと

ポケモンと言葉を学ぶ「ポケモンといっしょにおぼえよう!」シリーズは2009年3月から読売新聞朝刊で連載を開始しました。身近な英会話を紹介する「英語でひとこと」は2014年12月からスタートし、2015年12月21日から「Season2」が始まりました。

カードを選んでスキット（寸劇）を作る高木学園女子高校の生徒たち=秋月正樹撮影

生徒の声

「楽しく英語を学べたし、ポケモンも覚えられた。前より英語が好きになりました」　久保田麗さん

「さまざまな選択をしながら、何通りもの会話の仕方ができたのがとても楽しかった」　福留瑛夏さん

「すごろくゲームは普段使える英語もあって勉強になった。読売新聞でポケモンを探してみたい!」　海老塚聖美さん

「苦手な英語を、好きなポケモンで勉強できてとても楽しかった」　佐々木まりなさん

「カードのポケモンがかわいかったり、かっこよかったりして選ぶのも楽しかった。ポケモンの名前と英語が覚えられるのは一石二鳥」　片山愛理さん

「覚えた単語を家でも使ってみたい。こんな授業をもう一度やってほしいと思いました」　矢澤采佳さん

「ポケモン英語でこんなに楽しく勉強ができるんだなと思った。これからしっかり新聞を読もうと思います」　保坂ひよりさん

第1回 片倉もとこエッセイ賞

久保樹梨亜さん 最優秀賞に

日本とアラブの若者を対象に募集した第1回片倉もとこエッセイ賞最優秀賞に、東京都渋谷区の富士見丘高校3年・久保樹梨亜さん（18）の「UAE（アラブ首長国連邦）での滞在を通して感じたこと」が選ばれた。2013年春、学校の短期留学の一環として訪れた産油国での濃密な4日間は、世界に羽ばたく勇気と夢を与えてくれたという。

「英国でくじけなかったのは、少林寺拳法で心を鍛えられたからです」と話す久保さん。

片倉もとこエッセイ賞
中東でのフィールドワークに生涯をささげた文化人類学者、片倉もとこさんの遺志を継承するため、日本アラブ協会が2015年に創設。問い合わせは同協会（03・3798・3515）へ。

UAEでの発見、将来の夢つづる

「日本の石油輸入量1位はサウジアラビア。ならば2位の国はどこ？」――

久保さんがUAEの存在を初めて知ったのは小学校5年生のとき。世界地図で探すと、ペルシャ湾に面した小さな国だった。この時、七つの首長国からなる連邦国家が、自分の将来に大きな影響を与えるとは知る由もなかった。

時は流れ、高校進学直前の3月、雪の降る英国からUAEの首都アブダビに降り立った。ロンドンの語学学校で学んだ英語が通用するかを非欧米圏で試すという留学プログラム。40度近い猛暑とアラビア語の案内板に迎えられ、渡航前に感じていた不安が膨らんだ。

エッセイでは、その不安を親近感へと変えた様々な発見と出会い、将来の夢をつづった。

「女性たちが肌を隠すために着る民族衣装アバーヤは厳しい戒律の象徴。でも、風が吹くと生地が揺れ、アバーヤの下におしゃれな服を着ているのが分かりました」。ファッションを楽しむ気持ちが自分たちと変わらないと知り、心が軽くなった。

国際交流の楽しさに目覚めたのは、UAE大学の学生たちとの交流がきっかけだ。中学から始めた少林寺拳法の演武を披露すると、学生たちに囲まれ、英語による会話が始まった。「話題は少林寺拳法からアニメ、アイドルへと変わり、まるで日本の学校で友達と話しているような感覚を味わいました」。身近な趣味から世界と関係を築けるという発見、言葉が国境や文化の違いを超えられるという驚きに、心が震えたという。

収穫と同時に課題も突きつけられた。「私が理解できない言葉を簡単な英語に言い換えてくれるなど、学生たちは配慮してくれていた」。相手に気を遣わせない英語力があれば、異文化を理解し共感する力は飛躍的に向上する。その力がほしかった。

英国に3か月の留学

帰国後、英国の姉妹高への留学審査を受け、高1の秋に渡英。覚悟はしていたが、寮制の女子高校で待ち受けていたのは試練の3か月だった。

「最初は授業に全くついていけませんでした。理科系科目では専門用語が飛び交うし、日本で学んだことのない物理の授業は本当につらかった」。

宿題も追い打ちをかけた。寮の談話室で思い思いの時間を過ごす生徒たちを横目に、消灯直前まで分厚い教科書に向かう日が続いた。「私は徹夜をしたいのに、寮は午後10時消灯。異次元の集中力で勉強していました」と笑う。

だが、留学して2か月が過ぎたある夜、談話室のガールズトークの輪に入れた。「消灯前に宿題が終わったんです。ドイツ、スペイン、ナイジェリア、中国。様々な国の女の子たちと話せたのが本当に嬉しかった」

日本とUAEの架け橋に

エッセイで「日本とUAEの架け橋になりたい」と書いたのには理由がある。

滞在最終日、ドバイの超高層タワー展望台にのぼり、眼下に広がる光景に目を奪われた。高層ビルが林立する地域と、まだ開発が及んでいない地域。くっきりと線引きされた街に「私は観光名所など表面的な部分しか見ていなかった」。

展望台から見た、あの不毛な大地を豊かにできるか。答えはUAEと日本の交流を深化させることにあると考えている。さらに、格差に苦しむ世界中の人々の力になりたいという思いもある。大学で英語に磨きをかけるつもりだ。

インターハイ応援ミニムービー「待ってろ、世界」 スピンオフドラマ 1月1日に公開

7月に公開したインターハイ（全国高校総体）応援ミニムービー「待ってろ、世界」のスピンオフドラマが完成、2016年1月1日にウェブサイト「読売新聞ブランド企画部です」などで公開します。挿入歌は、本編と同じ人気デュオ・スキマスイッチのインターハイ応援ソング「夏のコスモナウト」です。

スピンオフドラマは3部構成で、俳優の岡本海（かい）さん演じる主人公の陸上部員が、CGで描かれた空想の外国人選手や新入部員との競い合いを通じて心身ともに成長していく様子を描いています。本編に続いて、主人公を支える陸上部マネジャー役で女優の北村優衣（ゆい）さんも出演します。

「夏のコスモナウト」全曲に乗せた、ドラマ3編の総集編も合わせて公開します。

ウェブサイト「読売新聞ブランド企画部です」のインターハイ特集コーナーはこちらです。http://pr-yomiuri.com/topic/interhigh

主人公を元気付けるマネジャー（右）

空想の外国人選手、新入部員との戦いが主人公（中央）を強くする

就活講座「キャリアデザインセミナー」開催

就職活動を控えた大学生と大学院生を対象に、読売新聞東京本社は2016年1月から2月にかけて「キャリアデザインセミナー」を開催します。今年も、人気企業に内定した学生が就職活動のポイントをアドバイスします。また、人気講師の阿部淳一郎さんが、就職活動に役立つ自己分析のほか企業研究や面接対策、新聞活用法などを懇切丁寧に伝授します。

セミナーは、志望業種ごとに計4回。参加は無料ですが、1人1回のみとなります。マスコミ業界（新聞・出版・広告）志望者向けのセミナーは1月30日（土）に東京・大手町の読売新聞東京本社で。金融業界志望者向けは2月3日（水）、商社志望者向けは2月8日（月）、メーカー志望者向けは2月12日（金）にいずれも東京都渋谷区のダイヤモンド社石山記念ホールで開催します。

詳しくはウェブサイトをご参照ください。申し込みはこのページからできます。https://navi17.shukatsu.jp/17/yomiuri/

出前授業「新聞社ならではのテクノロジー」開講

読売新聞東京本社は12月から、技術総合職の技術を紹介・説明する出前授業「新聞社ならではのテクノロジー」を開講します。これまでは、新聞記者が取材経験に基づいた様々な問題について語る出前授業はありましたが、技術スタッフが新聞制作の裏側を支える技術を紹介する出前授業は初めてです。　新聞記者が取材した情報をいち早く「新聞」や「WEB」といった製品（商品）にして皆様にお届けできるか。それを常に考えている「メーカー」の一面を持つのが新聞社の技術社員です。

記者が取材した現場写真や記事を、本社に送信するためのアプリケーションや通信環境。それら素材を的確に構成し、新聞紙面に組み上げるための新聞組版に特化したレイアウト機能。毎日900万部以上を短時間に印刷する技術。新聞に掲載された記事や写真をWEBにアップ、ヤフーなど各メディアに配信する技術。新聞社にはたくさんの技術が集結しています。その技術をご説明します。どんな仕組みで皆様の手元にニュースが届いているか聞いてみませんか。

対象は、小学生から大学院生までどの年代にも対応します。実施は無料。申し込み、お問い合わせは、教育ネットワーク事務局（☎03・6739・6985）へ。

学校教材用新聞 特別定価のご案内

News

読売新聞は、小・中学校や高校、大学などが教材として「読売新聞」や英字新聞「ジャパン・ニューズ」を活用する場合、定価の半分以下になる「学校教材用新聞特別定価」で提供しています。同一の日付の新聞をまとめて10部以上使用する場合が対象です。

読売新聞の1部売り定価は朝刊130円、夕刊50円、ジャパン・ニューズ150円ですが、学校教材用新聞は

①10部以上30部まで
　朝刊1部40円、夕刊1部20円
　ジャパン・ニューズ1部70円
②31部目から
　朝刊1部30円、夕刊1部10円
　ジャパン・ニューズ1部50円

読売中高生新聞、読売KODOMO新聞は5部以上の使用が対象

読売中高生新聞（毎週金曜日発行）と読売KODOMO新聞（毎週木曜日発行）の1部売り定価は、読売中高生新聞200円、読売KODOMO新聞150円のところ、いずれも5部以上であれば、1部当たり中高生新聞が20円、KODOMO新聞が15円となります。

お申し込みは、「読売新聞」「ジャパン・ニューズ」は配達希望日の2日前（土、日、祝日を除く）までに、「読売中高生新聞」「読売KODOMO新聞」は配達希望日の10日前までに、申込書に必要事項を記入し、FAXで下記へ。申込書は読売新聞のホームページの「学校教材用新聞」（http://www.434381.jp/26/school/）からダウンロードできます。

●申し込み・FAX番号は以下の通りです
■東京本社　03-3216-8824
■大阪本社　06-6361-2424
■西部本社　092-715-5933

海外で学ぶ・リレーエッセー⑫

英サセックス大学「アフリカでビジネスを体験して学ぶ」

滋賀県立米原高校（滋賀県米原市）卒、英サセックス大学2年 森雅貴（もりまさたか）さん

タンザニアの洋服店の森雅貴さん（本人提供）

英国は国際開発分野の研究では定評がある。アフリカ大陸の主要な植民地勢力だった歴史に照らせば皮肉なことだ。QSの2015年版大学ランキングによれば、サセックス大学は世界中から集まる様々な背景を持つ学生を最高の教授陣が魅了している。

というわけで、私はサセックス大学に惹きつけられた。違う背景を持つ色々な考えを持つ学生がいる。この環境に鼓舞され、興奮させられる。とりわけ開発途上国からの留学生は、自分が直面する難題や母国の状況を教えてくれる。例えば、ケニアでは、カネの問題や地元の政治状況のせいで子どもたちが教育を受けられないこととか、生活水準について教えてもらった。これらの事実は想像以上に厳しいものだった。そこで、日々変わっていくアフリカの現状をこの目で確かめなければ、と私は思いついた。

1年生だった昨年夏、東アフリカに旅行して、金城拓真さんに会った。彼は、アフリカで約50の会社を経営し、仕事を作り、タンザニアや他のアフリカ諸国に新しい技術を紹介している。彼のアフリカ・ビジネスにかかわる話は単に面白いだけではない。聞けばやらずにはいられなかった。そこで1年間休学して、金城さんのもとでインターンシップを受けてみようと決心した。

タンザニアでのインターン期間中を通して、学んだことはたくさんあった。たとえば、彼は私に中古車販売業、不動産業、ベーカリーを経験させてくれた。この国に滞在して、ダイナミックな経済成長を感じ、英国の大学で学んだこと、すなわち開発途上国ではインフラ開発が急速に進んでいることが、まさにタンザニアで起きているのだ、ということを目の当たりにしたのだ。もう多国籍企業がどんどん進出している。

いくつかの仕事に携わっているうちに、フラミンゴ（※）という名前の新ブランドを立ち上げる機会を得た。地元の染物屋と仕立て屋の協力で、地元産のカラフルな洋服をデザインした。

英国の大学で学んだことは多い。今、広大でダイナミックな「教室」、アフリカで、まさに生活しながら学んでいる。9月には大学に戻り、ビジネスの観点から途上国の研究を続けることにしている。

（会報編集部抄訳 The Japan News 2015年7月17日）

※http://xprs.imcreator.com/free/africa_japan/flamingo

サセックス大学

英国イースト・サセックス州ブライトン近郊にある1961年設立の総合大学。学生数は14000人以上。120か国からの留学生を擁している。

海外留学を目指す高校生に進学支援を行っているNPO法人「留学フェローシップ」のメンバーが、海外のキャンパスライフをリレー連載します。留学フェローシップの詳細はウェブサイト（http://ryu-fellow.org）へ。

英語の原文はhttp://the-japan-news.com/news/article/0002254116でお読みいただけます。